

正しく得た富を正しく使う — 鉄鋼王 カーネギーの決心 —

(株)日本設備工業新聞社
代表取締役社長 高倉克也

貧しい移民の子がアメリカン・ドリームを実現して全米第2の大富豪となる。1位は石油王の異名をもつジョン・ロックフェラー、2位がアンドリュー・カーネギー(1835-1919)で鉄鋼王と呼ばれた。

天性の才覚と強靱な意志と不断の努力によって巨万の富を築いたカーネギーは66歳のときに会社を売り払い、社会に貢献するフィランソピスト(篤志家)として図書館、学校、コンサートホールなどを次々と寄贈した。音楽の殿堂として世界に名を轟かすカーネギー・ホールはその象徴だ。

晩年は平和運動に打ち込んだカーネギーは億万長者になったから善行に目覚めたわけではない。すでに青年時代から思い描いていたプランをみずからの使命として一途に果たそうとした。

生涯を通じて投じた莫大な私財はいわゆる慈善活動の範疇を遥かに超えている。「金持ちのまま死ぬのは不名誉なことである」とまで語っていたカーネギーの誇りとはいったい何だったのか。

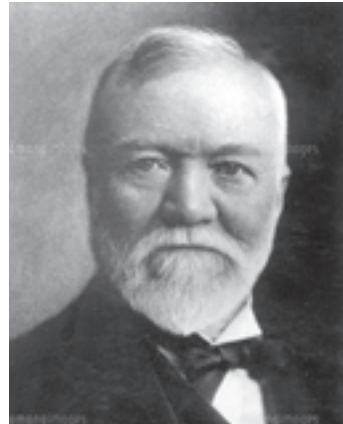
鉄道会社で出世して独立

カーネギーはスコットランドの古都ダンファームリンで織物職人の長男として生まれた。産業革命による機械化の波が押し寄せると一家は困窮し、母の姉妹がいるアメリカのピッツバーグへ両親と共に13歳で移住する。

最初は織物工場の糸巻き係として1日12時間

働かされた。何度かの転職後に電報配達夫となり、街の地理、企業の位置、実力者の顔などをすべて記憶して重宝された。すぐにモールス信号も習得し、有能な働きぶりで電信技士に昇進する。やがて顧客であるペンシルバニア鉄道のトーマス・A・スコットから秘書兼電信オペレーターとして引き抜かれ、スコットが副社長に昇格すると24歳の若さで地元の責任者に抜擢された。

1861年に南北戦争が勃発すると北軍を支援しながら需要拡大が見込まれる石油・鉄道産業に蓄えを投資して資産を築く。戦争が終結した1865年に独立し、スコットの援助も受けて鉄橋会社と製鉄所を設立。耐久性と柔軟性を併せもつ新素材の鉄鋼に着目し、木製の橋を鉄鋼製に架けかえる事業で急速に発展していく。1875年、大量生産が可能な巨大鉄鋼プラントを完成させて鉄道、橋梁、ビルなどに低価格製品を供給し、大富豪への階段を一気に駆け上がっていった。



アンドリュー・カーネギー

図書館で学び社会貢献へ

仕事に精を出す一方でカーネギーは勉強も怠らず独学で教養を身につけていった。本が彼の教師だった。とりわけ役に立ったのは電信会社で働いているとき地元の名士であるジェームズ・アンダーソン大佐が毎週土曜に開放した個人図書館だ。借りた本を持ち歩いて過酷な労働の合間に読み耽った。のちに『カーネギー自伝』で大佐の図書館のおかげで「牢獄の壁に窓が開かれ、知識の光が流れ込んできた」と回想している。

事業に成功したカーネギーは1883年、最初の図書館を故郷のダンファームリンに開設。以後、彼の寄付金によって2500を超える図書館が英語圏の国々で建設された。

読書で培われた知性は著述家としての才能も発揮させる。1886年に刊行した『民主主義の勝利』ではアメリカの自由な共和制を評価し、イギリスの封建的な君主制を批判して賛否両論を巻き起こした。1889年の『富の福音』では「裕福な人は富を浪費するよりも社会がより豊かになるために使うべきだ」と富裕層の道義的責務として富の分配による社会貢献を唱えた。

図書館と共にカーネギーが社会貢献の柱として情熱を注いだのが音楽の振興だ。1891年5月5日、ニューヨーク・マンハッタン7番街の一角を占めるミッドタウンにカーネギー・ホールをオープンする。「白鳥の湖」などで世界的に有名なロシアの作曲家チャイコフスキーを迎えたオープニング・コンサートには4輪馬車が400mに及ぶ長蛇の列を連ねて通りを埋めつくした。

文化面における社会貢献に加えてカーネギーは世界平和のための活動に精魂を傾けていく。1898年、アメリカとスペインによる米西戦争に勝利したアメリカ政府はスペインの植民地であるフィリピンの併合を画策する。帝国主義的な領土拡張は民主主義の根本理念に反するとしてカーネギーは『ハックルベリー・フィンの冒険』の作家マーク・トウェインらと反戦運動を展開し、米軍の撤退とフィリピンの独立を主張した。

いつの日か世界平和を

1900年、カーネギーの会社の鉄鋼生産量はイギ

リス一国の総量を上回る規模に達した。通常ならさらに事業を拡張して世界の頂点に君臨しようとするだろう。ところが彼はロックフェラーのように巨大財閥を形成することもなく引退の道を選ぶ。「金が貴いのは、それを正しく得ることが難しいからである。さらに正しく得たものを正しく使うことが難しいからである」と金の価値を熟知していたカーネギーは後半生を正しく使うことに専念しようとした。

1901年、鉄鋼業の独占を目論んでいた金融王のジョン・モルガンに個人取引としては史上最高の4億8000万ドルで会社を売却。同年、モルガンは買収した会社を母体に世界最大規模のUSスチールを設立した。

引退後はニューヨークを拠点に社会貢献のための研究所、基金、財団を数々と立ち上げていく。なかでも米西戦争を契機として国際平和のための活動に並々ならぬ熱意を注ぎ込んだ。

1910年、1000万ドルを投じて全米初の公的平和機関となるカーネギー国際平和基金を創設。1913年にはオランダのハーグに国際司法裁判所の前身となる平和宮を設立した。国際司法裁判所は国際紛争の法的解決をめざす国連の司法機関で1946年に発足し、本部が平和宮に置かれた。平和宮にはカーネギー財団も入っている。

第1次世界大戦開戦の危機が迫った1914年、カーネギーは平和を願う宗教界、学界、政界などの代表者を集めてチャーチ・ピース・ユニオン(CPU)を結成する。しかしCPUが南ドイツで初の国際会議を開催しようとした8月1日、ドイツはベルギーに侵攻して世界大戦が勃発する。

CPUの活動と並行してカーネギーはドイツ皇帝のウィルヘルム2世に外交使節を派遣し、巨額の資金提供と引き換えに開戦を思いとどまるよう説得していた。それだけに落胆は激しく重い鬱病状態になったという。

1916年に購入したマサチューセッツ州の自宅で3年後に83歳で他界する。臨終間際の日記には「日々、体が弱りゆくようであるが、いつの日か戦争が国際的な平和法廷によって消え去るとの思いはいまなお体に残っている」と記した。

生前のカーネギーが社会貢献で投じた金は3億5000万ドルで総資産の90%に達していた。